

「SPAC 秋のシーズン 2025-2026」ラインナップ発表！

2025 年度のアーティスティック・ディレクターに劇作家・石神夏希氏

世界の名作戯曲を現代の演出でお届けする SPAC のシーズンプログラム。2025 年度の「SPAC 秋のシーズン」のアーティスティック・ディレクターに、劇作家・石神夏希氏を迎え上演します。

「秋のシーズン」では、週末の一般公演に加え、平日には若い世代がはじめて演劇にふれる機会として「中高生鑑賞事業公演」を行い、毎年 1 万人をこえる県内各地の中高生に本格的な舞台鑑賞の機会を提供しています。

(*「SPAC 秋→春のシーズン」は「SPAC 秋のシーズン」に名称変更しました)

SPAC-静岡県舞台芸術センター 芸術総監督 宮城聡のコメント

SPAC-静岡県舞台芸術センターは今年、財団設立 30 周年を迎えます。

これを機に、「舞台と客席」の範疇にとどまらずに、広く社会の課題解決や新たな価値の創造にわれわれの蓄積を活用してゆこうと、「SPAC が社会に染み出す」フェーズ、いわば「SPAC2.0」のフェーズに進もうと考えております。

僕は SPAC の芸術総監督としてこの「SPAC2.0」の諸事業を開発・展開するとともに、組織のガバナンスにもいっそう注力していくつもりです。

そこで、25 年度の SPAC「秋のシーズン」では、アーティスティック・ディレクターとして石神夏希氏を迎え、3 作品のプロデュースに関する仕事をお任せすることにいたしました。

<社会に染み出してゆく>SPAC にぜひご注目いただき、また石神氏プロデュースの秋シーズン 3 作品にご期待をお寄せいただきたく、ここにお知らせいたします。

2025 年度も SPAC-静岡県舞台芸術センターをどうぞよろしくお願い申し上げます。



photo by 加藤孝

石神夏希氏からのコメント

生まれ育った首都圏を離れ、2020 年から静岡で暮らし始めました。以来ときには子どもの通う保育園で、ときには商店街の人との会話から、地域に根ざした公立の劇団・劇場である SPAC が、この土地で生活する人たちにとってどのような存在なのかを肌で感じてきました。また SPAC 秋のシーズン（旧・秋→春のシーズン）には平日の昼に足を運び、中高生に交じって観劇する機会が増えました。劇場に来たことがないという若い人たちが「生まれて初めて演劇と出会う」瞬間に立ち会うことは、いつも特別な体験でした。

今回ディレクションをさせていただくにあたって、観客席の闇の中で感じた子どもたちのあの息遣いをなんども思い返しました。そしてコンセプト、というよりむしろメッセージとして<きょうを生きるあなたとわたしのための演劇>ということ、シーズンを通じて伝えたいと思いました。

ラインナップを組む際には「生活者としてのアーティスト」がどのような物語を届けたいと思うのか、というシンプルな問いを立てました。観る人の身体の裡に永遠に残る一瞬を結実させようとするのと、きょうもあしたも続く生を生きること。相反するふたつの方向に引き裂かれながら、目の前にいる観客とともに「この世界の手触り」みたいなものをなんとか掴もうとする。演劇の上演とはそのような愚直な行為だと思います。私はそんな矛盾した、だからこそ切実な営みに心を動かされます。SPAC と観客の皆さんとの間で三十年という月日をかけて積み重ねられてきた対話に思いを馳せながら、劇場にまたひとつ新たな窓を開くように、今シーズンが「新しい風」を吹かせることを願っています。



photo by 牧田奈津美(F4.5)

石神夏希 プロフィール

劇作家。1999年よりペピン結構設計を中心に活動。国内外で都市やコミュニティのオルタナティブなふるまいを上演する演劇やアートプロジェクトを手がける。近年の主な仕事に「東アジア文化都市 2019 豊島」舞台芸術部門事業ディレクターおよび『Oeshiki Project ツアーパフォーマンス《BEAT》』作・演出、2019 台北芸術祭 ADAM Artist Lab ゲストキュレーター、静岡市まちは劇場『きょうの演劇』企画・ディレクター（2021年度）他。SPACでは、2022年に『弱法師』（作：三島由紀夫）、2023年に『お艶の恋』（原作：谷崎潤一郎『お艶殺し』）、また「ふじのくににせかい演劇祭 2024」にて、間食付きツアーパフォーマンス『かちかち山の台所』を演出。2025年度、「SPAC 秋のシーズン 2025-2026」のアーティストック・ディレクター。

SPAC 秋のシーズン 2025-2026 上演プログラム

世界の名作戯曲を現代の演出でお届けする SPAC のシーズンプログラムは、世界屈指といわれる演劇の創造拠点としての機能をフルに活用し、国内の新進気鋭の演出家・アーティストとの創作を経て上演が行われています。週末の一般公演に加えて、「劇場は世界を見る窓である」との理念のもと劇場を広義の教育の場と捉え、平日には「中高生鑑賞事業公演」*を行ない、毎年1万人以上の中高生に本格的な舞台鑑賞の機会を提供しています。

*「中高生鑑賞事業」は2003年度からスタートし、現在までの累計鑑賞者数は約21万人を超える。

【中高生鑑賞事業公演数<平成21年(2009年)~令和5年(2023年)の累計>：約830回、鑑賞者数 約21万人】

(SPACのこれまでののべ公演数：約3,300回、鑑賞者数 約89万人(海外公演含む))

#1 10月 静岡芸術劇場 | 1~2月 浜松市浜北文化センター/沼津市民文化センター
三島由紀夫生誕100年記念

『弱法師』

作：三島由紀夫 演出：石神夏希

盲目の青年・俊徳が語る「この世の終わりの景色」とは――。現実世界を「幽霊」と否定する彼に、明日はやってくるのか？三島由紀夫が能の詞章を近代劇に翻案した「近代能楽集」の一編『弱法師』を、都市やコミュニティを題材に公共空間でのアートプロジェクトを手掛けてきた劇作家・石神夏希が演出。2022年にSCOT サマー・シーズン(富山)、舞台芸術公園「BOXシアター」にて初演、四方を客席が囲む舞台とその斬新な演出は高評を得て、今回は静岡芸術劇場での再演となる。太平洋戦争から15年、戦災により親とはぐれ、失明した美しい青年・俊徳の親権を巡り、家庭裁判所の一室では二組の夫婦による調停が行われていた。決着がつかない中、見かねた調停委員の級子は、俊徳と二人きりで話をするが…。



石神夏希演出 SPAC『弱法師』 撮影：三浦興一

#2 11-12月 静岡芸術劇場

『ハムレット』 【新作】

作：ウィリアム・シェイクスピア 演出：上田久美子

「演劇とは自然に対して掲げられた鏡」(ハムレット) —
国内外での精力的な活動により、いま注目を集める演出家・上田久美子が SPAC に初登場。大衆性と芸術性の架け橋となり、「初めて観る人が楽しめる」ことにこだわる上田が、シェイクスピアの名作戯曲で SPAC と初タッグを組む。デンマークの王子ハムレットは、父の突然の訃報に急ぎ帰国するも、祖国では叔父クローディアスが王位を継ぎ、母は叔父と再婚していた。全てを失い呆然とするハムレットの前に亡霊が現れ、「私を殺したのはおまえの叔父だ、復讐せよ！」と語る。俳優の身体を媒介として、人間の愛憎や正義、死後の存在、宇宙や自然界の摂理を同時に描く意欲作。



2022年度 全国共同制作オペラ レオンカヴァッロ：歌劇「道化師」より
©2-FaithCompany

上田久美子 プロフィール

奈良県出身、劇作演出家。一般企業勤務を経て、2006年より宝塚歌劇団演出部に所属。2015年、『星逢一夜』にて読売演劇大賞優秀演出家賞。オリジナル戯曲で深遠なテーマ性とエンタテインメント性を両立させ支持を集めたが、2022年に退団。宝塚以外での作品は、2022年、スペクタクルリーディング『バイオーム』(脚本)、2023年全国共同制作オペラ『道化師・田舎騎士道』(演出)など。『バイオーム』で岸田國土戯曲賞最終ノミネート。2025年、主催公演『寂しさにまつわる宴会』(脚本/演出)。アートと娯楽の境界を取り払って、多様な人々に同時代の問題を共有できる作品を生み出すことを目指している。セゾンフェローII。



#3 1~3月 静岡芸術劇場

『ガリレオの生涯(仮題)』 【新作】

作：ベルトルト・ブレヒト 演出：多田淳之介

いまわたしたちが常識としているものは、いつ誰によって唱えられたものなのか。天動説が常識とされた時代に地動説を唱えたガリレオの半生を、ナチス時代を生きた自身の生涯と重ね合わせたベルトルト・ブレヒトの傑作戯曲。情報があふれ、何を信じるのが切実な問題となっている現代、この作品が描き出す「真実」とは。2023年、“観光演劇”と称しポップで臨場感のある新感覚の舞台『伊豆の踊子』で多くの若者を魅了した多田淳之介が、この歴史的大作で現代を生きる若者に問いかける。SPACの俳優20名が出演する群集劇。



多田淳之介演出 SPAC『伊豆の踊子』©K.Miura

多田淳之介 プロフィール

演出家。東京デスロック主宰。古今東西の戯曲の上演、ダンス作品、観客参加型作品など多彩な作品を国内外で上演。創作活動と並行して公共劇場の芸術監督や自治体のアートディレクター、フェスティバルディレクターを歴任。全国の劇場や学校、地域施設でのこどもからシニア、外国人、障害のある方など様々な人々との創作やワークショップ、アートによる地域課題への取り組みを実践する。2013年日韓合作『ガモメカルメギ』にて韓国の第50回東亜演劇賞演出賞を外国人演出家として初受賞。四国学院大学、女子美術大学非常勤講師。SPACでは2018年に『歯車』（作：芥川龍之介）、2023年に『伊豆の踊子』（作：川端康成）を演出。



©平岩享

SPAC 秋のシーズン 2025-2026 | 主催・製作：SPAC-静岡県舞台芸術センター ふじのくに芸術祭共催事業

【2026年度初演予定 | SPAC 新作】 台本・演出：石神夏希

『うなぎの回遊 Eel Migration』（仮題）

SPACと劇作家・石神夏希が手掛ける新作パフォーマンス。主要キャストとして、県内に多く暮らすブラジルにルーツを持つ地域住民を迎え、彼らとの対話や共同作業を通じて「移動と生殖」をテーマとしたフィクションの戯曲を創作。日本語・ポルトガル語を交えて上演する。

【創作スケジュール（予定）】

2024年6月-	リサーチ開始
2025年2月-	クリエーション開始
2025年4-5月	限定公開リハーサル（静岡県舞台芸術公園 BOXシアターにて）
2026年2月	浜松にて ワーク・イン・プログレス発表

©事業・公演内容等は、都合により変更・追加になる場合がございます。

SPACの創作現場では、SPACハラスメントガイドラインに基づき一切のハラスメント行為をなくし、全ての参加者が心身ともに安心して関わられるような場づくりに努めています。

このほかの年間ラインナップはSPAC公式ページをご覧ください。

<https://spac.or.jp>

お問い合わせやご取材は、「SPAC-静岡県舞台芸術センター 広報担当 坂本」までご連絡下さい。
TEL：054-208-4008（静岡県舞台芸術公園） / FAX：054-203-5732 / E-mail：koho@spac.or.jp